

五重の義

自己尊重

甲「先生、私はどうしてもお領解が頂かれませぬ。どうしてしぶとい奴なのでしょうか。」

乙「何年ぐらい、寺にまいりますか。」

甲「二十七年ほど聞かしてもらいました。その間にはこれが信仰だと喜ばしてもらったこともあるのですが。」

乙「ほう、二十七年！ それでそんな状態ですか。あなたも道を求めないで話を聞いて歩いた人ですね。」

甲「それでも先生………変わらなないと仰せられるのでしよう。」

乙「ほう、二十七年かかって変わらないうことだけをおぼえたのですか。み仏のお慈悲はわからずに。あなたは、明法房、すなわち弁円が稲田の草庵で聖人のお弟子となつて後のある日、待てど待てど帰り給わぬ聖人の御身を案じて、お迎えに出て、板敷山のあたりに立つて

『山も山、道も昔にかわらねど かわりはてたるわが心かな』

と詠じたことを聞きましたか。」

甲「いつもお説教で聞いています。」

乙「今、あなたは、それでも変わらぬと言われるのでしようと言われましたが、この弁円の歌には、変わりはてたるわが心かな。変わりも変わつたり、変わりはてたとあるではありませんか。」

甲「先生、それでは変わらねばいけないのですか。」

乙「それもあなたのはからいです。如来のみ心がとききれば、変わるべき所は変わるでしょう。変わらないう所は変わらないうでしょう。それよりも、もつとはつきり、如来の招喚のみ声にふれることです。あなたは、如来を殺しています。如来を盲目にしています。いな、あなたは勝手な仏を造つて弄んでいます。」

甲「それはまたどうですか。」

乙「ごらんなさい。あなたは自力の領解を造つてそれを役だてようとしているではありませんか。しかるに真実の仏は生きています。生きているから働いています。」

甲「それはまたどうですか。」

乙「あなたは何をここに来たのですか。三十年近くも聞法に出されるほど恵まれているあなた、そのあなたが今そこにいるではありませんか。まず解くべきは、今の今、私の前に坐っているあなたではありませんか。あなたは、私があるを尊重するほど、あなた自身を尊重していません。」

宿善

甲「それはまたどういふことですか。」

乙「如来の招喚を聞かしていただいて信心決定の身になった時、仏は死仏でなかったことがわかるのです。私がお領解してからそろそろ私の上に働いてくださる他人

仏ではなかつたのです。乃往過去、久遠無量、不可思議、無央數劫のむかしからの大因縁が成就されて、はじめて発起せしめられた、金剛の真心でした。私にとつては、今の今、あなたにこうしてお出会いして、ともにみ法を語っていることはありがたいことです。ありがたいとはどんなことか。いかにも偶然にあつたようだが、合わずにはいられない必然の力のしからしむるところであつたのです。たんに偶然でもありがたくはない。たんに必然でもありがたくはない。しかし——考えてください。私は本年三十九歳になりました。今私は三十九歳の総勘定があなたに会っているのです。あなたは？ 五十二歳ですか。あなたもまた五十二歳の総勘定が私に会っているのです。しかもみ法を求めて、三十九歳と、五十二歳、よくも会われたことです。さらにみ仏のみ教えから言えば、三十九歳でなく、五十二歳だけてなく、じつに過去久遠劫の因縁の総決算が会っているのです。私の過去にも、いやなこと、苦しいこと、切り棄てたいときえ思われる部分、罪惡のみに埋もれたところ等々であります。それさえ、もし一分一秒のできごとが違っていたら、今日会つてはいない。この寺に来てご厄介になつてはいない。そんなに考えてくると、この死んだ過去を生かしているのは何でしょう。久遠の昔からの因縁の総決算がみ法を求めるようにしたのは、だれなのでしょう。」

甲「それは私が行ったのではないのですか。」

乙「そうです。もちろんあなたがしたのですが。それをそうさせたものがあるのです。宿善はあなたが成就したのです。だが、それを成就せしめた者はだれか。それがすなわち如来の光明なのです。如来はじつに久遠の昔からその大光明と大慈悲²とを私たちの上に打ち込んでくださつたのです。その如来の光明が、宿善を成就して開発する時、そこにはじめて善知識に会うのです。」

善知識

甲「それでも私はこれまで多くの善知識に会いつつも、まだ信心が得られませんでした。それはどうなるのですか。」

乙「あなたのご講師や先生には会つたでしょう、しかしそれが善知識にはならなかつたのです。何が善知識になるか、だれが善知識になるかわかりません。」

甲「先生！ わかりました。私は如来のお慈悲の中にいつつ、それを知らなかつたのです。今こそ久遠劫来のお慈悲によつて、如来のみ心を説いてくださる如来のお使いに会つたのです。」

乙「あなたは、如来の大慈悲を聞かしていただく前に、なんらかの準備を造りあげて、そうして後に仏をおまねきしようとしていたのです。喜ばれたらこれこれ、機の様が変わればこれこれと、あなたの機一つで猫の眼のように変わる死仏でした。いづくぞ知らん。ほんとの仏はもつと違つた所で働いていました。さつき私は『私があるを尊重するほど、あなたはあなたを尊重しない。』と言いました。私は、○からはるばる正法を求めて来たあなたの後ろに仏を拝します。久遠の昔からあなたの上にその魂のすべてを打ち込んでいる如来を拝みます。今日一日のあなた

の歩みだつて、如来なくしてはなかつたのです。何よりもまず、ここに座つてゐるそのあなたを解かなくてはなりません。」

甲「私が知らせていただかない先に、私に働きます仏を、私を通して拜んでいなさる先生こそ、私の善知識です。私は今まで何を聞いていたのでしょうか。まことに如来なくしては道さえ求める奴ではなかつたのです。それに何もかも私がしているようにうぬぼれしていました。久遠劫来招びかけていてくださったみ親の勅命がはじめて聞こえました。私は如来を殺していました。」

光明

乙「救われる以前も、如来の光明、救われた後も如来の光明です。救われる以前が、光明遍照十方世界、遍照の光明の中に育てられていたのです。一念、み仏に自力をとられること、念仏衆生撰取不捨、撰取の光明に抱かれます。もちろん如来の智慧光に二通りあるのではないのです。」

甲「見れば見るだけ罪惡の凡夫でありますが、しつくりとおちつけます。如来の光明に撰取されるのです、ありのままの私が。私は満ち足りた心であります。」

信心

乙「その撰取不捨の大慈乙悲にふれることこそ、すなわち信心です。」

甲「何という自然な信心でありましょう。過去、現在、未来の三世を貫くお慈悲と常に聞いていましたが、私はそう聞きつつも、未来にのみかたよせて不安に苦しんでいました。」

乙「信樂とは、衆生が成就するのでなくて、如来心そのものです。南無阿弥陀仏へ寸毫も加えるのではないのです。南無阿弥陀仏そのものが三世を通して輝ききります。能念、所念、念ずる心も念ぜられる心も、六字の中にあるのです。その大行が私たちの上に顕現したのにすぎないのです。念ずる心も、拜む手も、称うる口も……」

名号

……ですから、一切は南無阿弥陀仏の名号におさめられます。今あなたのお口から流れているお念仏は、その大行が、救われきつた、報謝の称名となつていゝのです。以上をまとめますと、一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名号と、いわゆる「五重の義」が成就されているわけです。一にして五、五にして一、何もかも名号一つにおさめられるし、また何もかも信心一つにもおさまり、その他どれでもそうであります。」

甲「長い間お聞かせに預つてありがとうございました。まったく如来をはなれてない私を聞かしていただきました。これからいよいよ聞かしていただきますでしょう。」

乙「そうです。一生をみ法を聞き、み法を生活するために使わしていただきました。そのみが人生の意義であり、永遠に生きる道であります。」